
谷口くんの彼女は変わっている

高岡たかを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

谷口くんの彼女は変わっている

【Nコード】

N7989Q

【作者名】

高岡たかを

【あらすじ】

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。
ボクと、谷口くんの彼女の日常。

その1

(1)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

ある日のこと、ボクが谷口くんの彼女の家に遊びに行った時の話。

「はい麦茶」

外は暑かったので、ありがたくいただいた。

「あ、ゴメン。麺つゆと間違えて麦茶出しちゃったー」

「……あってるから」

超高度なネタ振りだったのだろうか。

(2)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

麦茶の話の続きだ。

谷口くんの彼女は冷蔵庫の前で何かゴソゴソとやっていた。

「さっきから何してるの」

「うん。自家製麺つゆと水だし麦茶が似た容器に入っているから、

間違えないようにラベルをつけようと思ってねー」

それは殊勝な心掛けで。

「ねえねえ。麺つゆの『つゆ』って漢字でどう書くの?」

ボクはさっそく携帯を取り出すと、ウィキペディアで調べてみた。

「……液でも汁でもどちらでも良いみたい」

「ふーん。ありがとうー」

キュキュツキューっとマジックの音。

なんとなく嫌な予感がしたので、谷口くんの彼女の肩越しに覗いてみると。

ピンクの蛍光ペンで丸っこくて可愛い文字。

『MEN液』

「……………どうかなー……………」

「MEN汁の方が良かった?」

「どっちでもいいよ。もうどっちでもどうでも」

お昼に素麺をごちそうになった。

谷口くんの彼女が、谷口くんのお母さんから作り方を教わったという麺つゆはとても美味しかった。

谷口家の味だ。

その2

(3)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

谷口くんの彼女は子供が好きだ。

カバンの中にいつでも子供にあげる用の飴を常備しておくくらいの子供好きだ。

そんな谷口くんの彼女は、近所の子供たちから「アメのおねーちゃん」と恐れられている。

特に幼稚園児がドストライクゾーンの絶好球のようで、幼稚園の前を通った時など大変だ。放っておくと携帯のカメラ機能でいたいけな子供たちの撮影を始めてしまう。

あの時も大変だった。

ボクは毎日谷口くんの彼女を家まで送り迎えしているのだが、ある朝大学へ向かう途中の赤信号で、幼稚園バスの後ろに止まった。

助手席に座った谷口くんの彼女がにこやかに手を振ると、バスの後ろに座った園児も気づいたようで、小さな手を元気一杯に振り返ってきた。

ああ。可愛いなあ。思わずボクの眼尻が下がる。

「やっぱり子供は可愛いよねえ」

うんうん、と谷口くんの彼女にボクも同意。平和な朝の風景に心を温めていると、

「ねえねえ。大学行くのやめて、あのバスをバスジャックしてみんなで遊園地に行ったら楽しそうじゃない？」

温まったばかりの心がいきなり凍りついた。

恐る恐る助手席を見ると、本気の目をした犯罪者予備軍がそこにいた。

「マジと書いて本気と読むよ」

「誤用ではないよね。一応」

大切な親友の大切な彼女を犯罪に走らせる訳にはいかず、ボクは必死に説得した。

結局、その日は大学をサボって二人で遊園地に行った。
すごく楽しかった。

(4)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

ある日のこと、谷口くんの彼女の家で『LOST』を見てみると、谷口くんの彼女が唐突に言った。

「あー。温泉とか行きたいねえ」

「そうだね」

「近場で良いんだけどなあ。そうだ。今週末一緒に行こうよ」

「良いよ」

週末は予定が無かったので、ボクはすぐに返事をした。

「そうだ。こないだ、良さげな温泉を雑誌で見つけたんだけどね」

言いながら谷口くんの彼女は、無料のタウン情報誌を取り出した。ページをめくって温泉宿の紹介を探すと、机の上に広げて見せた。

「ここなんだけどね」

「へえ。近いしキレイな宿だね」

車で小一時間と言ったところ。ボクは略地図を眺めて道順を確認した。

うん。大丈夫。近くまでなら行った事がある。

麦茶を一口飲んだ所で、

「一緒に入ったらきつと楽しいよ」

咳き込んだ。

「え、え？」

「絶対楽しいよ」

無邪気な笑顔の谷口くんの彼女。

谷口くんの彼女はスタイルが良い。たまにボクでもドキツとするくらいだ。

「あ、混浴も有るんだって。私混浴って初めてかも」

「絶対イヤだよ！」

それは断固拒否したい。

「要水着着用って書いてあるから大丈夫だよ」

「それでもイヤだ！」

結局、谷口くんの彼女が夕方頃に「今すぐ温泉行きたいよう」と駄々をこねたので、もっと近場のスーパ―銭湯に行く事になった。湯上りに二人で飲んだコーヒ―牛乳はとても美味しかった。

その3

(5)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

谷口くんの彼女に誘われて、夏のバーゲンに行った日のことだ。
オシャレに興味のないボクは少し離れた所で見ていただけなのだけれど、アレは凄い迫力だ。

ワゴンに盛られた衣類を中心に戦場が出来上がっていた。その中で一際雄々しく光輝いていたのが谷口くんの彼女だ。ジェームズ・キャメロン監督がこの場にいたら、『アバター2』のラスト四十分
に多大な影響を与える事になるだろう。

「なんて闘気なの……！ 大地が震えているわ！」

いつの間にかボクの隣に立っていた店員さんが、恐れを滲ませながら呟いた。

いや、大地が震えているのは、ショッピングの建築上の問題だと思うんですけどね。

戦利品をパツンパツンに詰めた紙袋をいくつも提げて歩く谷口くんの彼女は誇らしげで、凱旋門をくぐるコンスタンティヌスカナポレオンのようだった。

この後はとりあえず谷口くんの彼女の家で、お昼ごはんを御馳走になりながら、『24』を鑑賞する予定だった。

谷口くんの彼女が作った特製麺つゆver. 2. 3はとても美味

しい。すでに谷口家オリジナル（ver. 1.0）を上回る美味しさだ。どれくらい美味しいかと言うと、悪魔的と表現しても良いくらいだ。

と、

「ごめん。ちょっと持ってた」

いきなり紙袋を押しつけられた。

戸惑うボクを尻目に、谷口くんの彼女が獲物を見つけた女豹のようになやかさと駆けていく。

谷口くんの彼女が向う先には、お散歩中の幼稚園児の一団が。年少組さんなのか、保母さんが押すワゴンの中に五、六人が可愛らしく収まっている。

「こんにちは」

谷口くんの彼女がにこやかに挨拶をすると、ワゴンの中の園児たちも声をそろえて「こんにちは！」と返してきた。

のどかな風景に、保母さんも相好を崩す。

と、谷口くんの彼女は保母さんに笑顔のままに聞いた。

「おいくらですか？」

「は、はい？」

保母さんが通報するより早く、追いついたボクの手が谷口くんの彼女を捕まえた。

危うく、のどかなお昼の住宅地を人身売買の現場にしてしまうところだった。

(6)

ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

谷口くんの彼女の家でお昼ごはん（今日は冷麦だ）をこちそうになっ

「ねえねえ。質問があるんだけど」

向かい合わせで箸を伸ばしていた谷口くんの彼女が挙手をした。
ボクは冷麦を一口すすり込むと、

「はい。質問を許可します」

「男女間の友情は成立すると思いますか？」

うーん、とボクは考えた。その間も箸が止まる事はなかったのだけれど。

「時と場合と人によるとボクは思います」

「つまり天地人という事ね」

地の利はどこに行ってしまったのだろう。そう思っていると、谷口くんの彼女がため息混じりに言った。

「まだまだ油断できないって事かあ……」

という意味だろう。

やっぱり、ボクの親友谷口くんの彼女は変わっている。

■■■■ おわり ■■■■

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7989q/>

谷口くんの彼女は変わっている

2011年2月16日19時29分発行